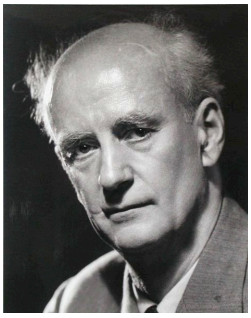


# フルトヴェングラー・センター®

# The Wilhelm Furtwängler Centre of Japan

創設 2003 年 10 月 1 日　Established: 1 October 2003

名誉会長　Prof. Dr. アンドレアス・フルトヴェングラー

Honorary President:  Prof. Dr. Andreas Furtwängler

会報第 72 号 2025 年 5 月 / Newsletter No. 72, May 2025

フルトヴェングラー・センター会員の皆様、

ここのところ、過ごしやすい天候が続いたものの、何かと理不尽な話題ばかりがマスコミを騒がせております。これからの世の中は一体全体どちらの方向に進んでいくのでしょうか。

一方今からちょうど 100 年前、レコードの録音が機械式から電気録音に移行しました。当時普及期に入ったラジオ放送の音質が機械式録音よりもすぐれていたため、レコードの将来に危機感を持ったウェスタン・エレクトリックが電気録音方式を開発したのです。電気録音によって本格的なハイファイ録音の時代に入ったと言っていいでしょう。

さて、会報 72 号は以下の内容でお届けします。

目次

1. 新譜 CD 頒布のご案内　P. 1 ～ 3
2. 桧山コレクション 第 4 集～第 23 集のハイレゾ音源頒布開始について　P. 3 ～ 4
3. 第 101 回レクチャー・コンサートの報告と感想　P. 5 ～ 10
4. 第 102 回レクチャー・コンサートの報告と感想　P. 10 ～ 13
（以上 2 項目　センター音響担当理事　　中村匠一氏）
5. レクチャー・コンサート記録ブルーレイ・ディスクのご案内　P. 14
6. センター既発盤へのご感想
アンドレアス・フルトヴェングラー　P. 15
ヘニング・スミット（オルセン）氏　P. 16 ～ 17
7. フランス・フルトヴェングラー協会の『新譜』について　P. 18
8. 第 103 回レクチャー・コンサートのご案内　P. 18

# 新譜 CD 頒布のご案内

センター会報第 60 号で「オルセン・ディスコグラフィー」の編纂者として、また世界でも有数のフルトヴェングラー研究家、（旧）デンマーク・フルトヴェングラー協会の創設者・会長として著名な Henning Smidth（ヘニング・スミット　通称オルセン）氏から、氏のオープンリール・テープコレクションをすべて寄贈いただいたことをお知らせしました。氏にはセンターの草創から Adviser としてセンターの活動を支えて頂いてきていますが、これらの貴重な資料をこれまで以上に充分に整備したテープデッキを使用して収録内容のすべてを引き出すデジタル化をおこない、高品質の CD-R 及びハイレゾ音源として会員の皆様に提供しています。なお、スミット氏のテープには、音質のあまり芳しくないものや、またフルトヴェングラーの全録音をカバーしきれていない部分もありますので、場合によって、既出の SP 盤、LP 盤やセンター自身が保有するテープ・アーカイブからの復刻も併せて行っております。

今回はこの中から次の１組をお届けします。

## 1947 年のブラームス交響曲第１番

### 1947 年 8 月 13 日　ザルツブルク音楽祭でのウィーン・フィル演奏
### 1947 年 8 月 27 日　ルツェルン音楽祭でのルツェルン音楽祭管弦楽団　演奏

フルトヴェングラーが指揮活動を本格化した 1911/12 年のリューベック時代から、最後の 1954/55 年のシーズンまでの 44 シーズンの内、45/46 年の活動停止時期と実際の演奏会を 2 回しか指揮しなかった 54/55 年シーズンを除く 42 シーズンの全てでブラームス作品を指揮しました。このうち、交響曲第１番の演奏回数は 180 回で、内訳は戦前戦中が 132 回、戦後が 48 回、（山下山人著「フルトヴェングラーのコンサート」（アルファベータブックス）を数えます。録音も、第 4 楽章のみの録音が１種、全曲ライブが １０種とウィーン・フィルによるセッション録音が１つ遺っています。

1947 年は、フルトヴェングラーにとって、1934 年に開始されたヒトラー政権時代を生き抜いたと思ったら、今度は自身が守ってきたと考えてきたドイツ人からの告発に心を痛めつけられた非ナチ化審判の日々を超えて、ようやく戦後の活動を開始できた特別な年でした。戦後の２年間は、家も財産も失い、若妻エリーザベトと彼女の四人の連れ子、それに生まれたばかりの長子アンドレアスと共に、スイス・クララランにある「Villa l'Empereur（皇帝荘）」の一室を、知り合いの医師の好意で借り受け、無収入の状態のもと作曲に勤しみつつ不安の日々を送っていました。

47 年にようやく非ナチ化が認められ、4 月に 4 回のイタリアでの公演を経て、5 月にベルリンでのベルリン・フィルへの復帰演奏会を果たすことができました。続いて 6 月にはベルリン、ポツダム、ハンブルク、ミュンヘンで計６回の演奏会を行い、8 月 10 日からザルツブルク音楽祭に参加し、（戦後ウィーン・フィルとの初共演）その第 2 回目 8 月 13 日のオーケストラ・コンサートで戦後初めてブラームスの第１交響曲を演奏しました。

この時の録音は当センターで一度 CD 化（WFHC-024）しましたが、現在は完売・頒布終了しています。今回改めてヘニング・スミット（オルセン）氏のテープを最良の条件で再生し、ピッチも整えた上で再度 CD 化します。カプリングは WFHC-024 と同様、従来 1945 年 1 月 23 日のベルリン・フィル録音とされてきた交響曲第１番の第４楽章ですが、フリードリヒ・エンゲル氏による最近の研究（2023年7月会報第６６号掲載「『前奏曲と結尾』『日付の問題』エンゲル氏によるマグネトフォンの発展、 及び従来 1945 年 1 月 23 日演奏・録音とされてきたブラームス交響曲第 1 番 第 4 楽章の録音について」を参照）で、これが実は 1940 年 12 月 15,16,17 日のライブ録音で「最初のマグネトフォン録音」ではないかとされている演奏です。従来は第２次大戦末期の緊迫した状況での演奏である、というのが定説でしたが、実は 1941 年 6 月 1 日に行われたマグネトフォン録音のお披露目の最後に再生され、参加者がその音の良さに驚嘆したとされる録音なのではないか、ということです。そのような新しい観点から同録音を改めて会員の皆様に提供することとしました。なお 8 月 13 日の公演では２曲目にブラームスのヴァイオリン協奏曲がメニューインのヴァイオリンで演奏されました。その際のリハーサルの映像がごくわずかの時間ですが残されていますので、その音声部分も併録します。

ザルツブルク公演の２週間後、1947 年８月のルツェルン音楽祭において、フルトヴェングラーはブラームスの「ドイツ・レクイエム」を 2 回指揮（8 月 20、21 日）したのち、27 日のオーケストラ公演では、アドリアン・エッシュバッハーのピアノ独奏でベートーヴェンの「ピアノ協奏曲第１番」と「レオノーレ序曲第３番」を前半に置き、後半でブラームスの交響曲第１番を指揮しました。３曲ともスミット氏のテープがありますので、これらを演奏会の順番通りに収録いたします。近接した２週間で演奏されたブラームスの交響曲第１番をウィーン・フィル、スイス・フェスティヴァル管弦楽団（ルツェルン音楽祭管弦楽団）とで聴き比べてください。

解説はいつもワクワクするような魅力的なアナリーゼを展開される舩木篤也氏にお願いしました。

## WFHC-073/75
## フルトヴェングラー指揮 1947 年のブラームスの交響曲第１番

頒布資料代：**CD-R ３枚組　WFHC-073/75　　頒布価格　6,500 円**（国内送料込み）
ご購入いただいた方限定で、192Hz/24bit ハイレゾ・デジタル音源も配信します：
**192kHz/24bit デジタル音源（wav） 追加価格　2,000 円**

1. CDR 製作用原盤の製作は「桧山コレクション」で使用してきている Plextor 社製作の CDR 焼成機の銘機「PlexMaster」により、その開発担当者でもあった小林照幸氏によって、パソコンなどの CDR 焼き込みでは到達できない純度の高い CDR 原盤を作成しています。

2. 頒布用 CDR 製作については、「桧山コレクション」でも使用したプロ仕様のハイスペックCDRを使用し、更に原盤を忠実にコピーする「1：1　オンザフライ」プロセスにより、原盤の音を完全に再現することといたしました。

資料申込要領：

1. 同封の郵便振込票をご利用ください。

2. 申し込み期限は **2025 年 5 月 30 日（金）**です。原則として受注生産を行いますので、できるだけ期限までにお申し込みをお願い致します。

3. この CD-R はセンター会員自身が所有される事を条件に 3 セットまでご購入いただけます。オークションを含む転売及び譲渡目的・名義貸しは一切お断り致します。

**発送予定：　　2025 年 8 月**

お問い合わせの際は　①振込年月日、　②振込金額をお知らせ下さい

＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

## 桧山コレクション　第 4 集～第 23 集のハイレゾ音源頒布開始について

センター顧問山口勗氏（ペンネーム 桧山浩介）から愛蔵のフルトヴェングラーの 78 回転盤レコード（以下 SP）コレクション約 170 枚を寄贈いただいたことは会報第 16 号（2007 年 12 月発行。曲目明細掲載）でご紹介いたしました。2014 年以来、それらの SP を中心にセンター会員諸兄のフルトヴェングラー研究に供するための資料として CD 化しご提供することとし、2021 年 6 月頒布の第 23 集までシリーズ化しました。

CD 化の最大の特徴は、演奏が複数面にまたがっている場合、繋ぐのが適当な時を除き各面をつながずに収録していることです。既発の SP 復刻 CD は少数の例外を除いて面と面（演奏を）をつないでいますが、これは演奏が途切れなく聴けるということで意味がある一方、実際に録音作業が行われていた場面を想像すると別の聴き方も考えられます。すなわち、テープ録音が導入されるまでは、おおよそ 4 分強ごとに曲を分割して、分割したパート単位に演奏し、録音されたものを試聴し、気に入らなければ Take2、Take3 と繰返し演奏～録音～試聴、OK になると次のパートの録音…これを繰り返して一つの作品に仕上げていました。したがって、パートとパート、Take と Take の間は例えば数十分～数時間の間が開き、時と場合によっては録り直しで数カ月～1 年も開いたことがあります。

その後はヘニング・スミット氏寄贈のテープによるホールマーク・コレクションが再開され現在も継続中ですが、同時により原音に近くスタジオ品質の「ハイレゾ・ファイル」での追加頒布も開始し、現在まで会員の方々のご好評をいただいております。

これらを聴かれた会員の方々から、「桧山コレクション」も同様にハイレゾ・ファイルで聴きたいというご要望が寄せられました。SP の再生をハイレゾ・ファイルで聴く、というのは意味があるのかどうかとセンター内部で検討した結果、両方を比較・試聴すると確かにハイレゾ・ファイルでの再生音が CDR よりも優れている部分があることから、今回そのようなプロジェクトを立ち上げることといたしました。

「桧山コレクション」での SP 盤の再生音のデジタル化にあたって、WFFC-1404-HYM 以降については、そもそも全て 96kHz/32bit または 192kHz/24bit のハイレゾ収録をし、編集・整音も全てハイレゾで行い、CDR に収録する最終段階で 44kHz/16bit に「ダウン・コンバート」してマスターを作成してきておりました。

そこで会員のご希望に応える観点から、「**桧山コレクション　ハイレゾ音源シリーズ**」と題して、これらをハイレゾ・ファイルとして追加頒布することといたしました。

初回は以下の 3 点をこれまで通り gigafile 便で頒布する予定です。CD 用のカバー・スリーブなどは印刷物としてお送りできませんが、代わりに制作時に使用したファイルを PDF 化して簡易的に添付いたします：

**●桧山コレクション　第４集**

① チャイコフスキー作曲　交響曲第 6 番 1938.10.25~27 (Michael H. Gray による)
　ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団 （ベルリン　ベートーヴェン・ザール）
② チャイコフスキー作曲　弦楽セレナーデ　第 2 楽章「ワルツ」　1950.2.2.
③ チャイコフスキー作曲　弦楽セレナーデ　第 4 楽章「終曲」　1950.2.2.
　ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団　（ウィーン、ムジークフェラインザール）
指揮　：　ヴィルヘルム・フルトヴェングラー
※詳細は会報第 40 号に掲載
WFFC1404-HYM-HiRes　　頒布価格：　2,000 円

**●桧山コレクション　第５集**

① ベートーヴェン作曲　交響曲第 3 番「英雄」 1947.11.10,11,12,17 及び 1949.2.15
　ウィーン・フィル （ウィーン　ムジークフェラインザール）
② ベートーヴェン作曲　《エグモント》序曲　1933.11
　ベルリン・フィル　（ベルリン、ベートーヴェンザール）
指揮　：　ヴィルヘルム・フルトヴェングラー
※詳細は会報第 41 号に掲載
WFFC1501-HYM-HiRes　　頒布価格：　2,000 円

**●桧山コレクション　第６集**

① ブラームス作曲　ヴァイオリン協奏曲二長調作品 77　1949.8.29 - 31
　ユーディ・メニューイン　／　ルツェルン祝祭管弦楽団（ルツェルン　クンストハウス）
② ブラームス作曲《ハンガリア舞曲第 1 番ト短調》
　《ハンガリア舞曲第 10 番ヘ長調》 ベルリン・フィル　1930 (ベルリン音楽大学)
　《ハンガリア舞曲第 1 番ト短調》
　《ハンガリア舞曲第 3 番ヘ長調》 ウィーン・フィル 1949.4.4
　《ハンガリア舞曲第 10 番ト短調》ウィーン　(ウィーン楽友協会第ホール)
指揮　：　ヴィルヘルム・フルトヴェングラー
※詳細は会報第 42 号に掲載
WFFC1502-HYM-HiRes　　頒布価格：　2,000 円

**資料申込要領は**上記ホールマークコレクションと同様です。

＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

## 第 101 回レクチャー・コンサート　（講師：　指揮者　坂入健司郎氏）

（2025 年 1 月 18 日(土)開催）

**フルトヴェングラー・センター　音響担当理事　中村匠一**

1/18 のフルトヴェングラー・センターは気鋭の指揮者、坂入健司郎さんを講師にお招きして「フルトヴェングラーは同時代の作曲家の曲をどう振ったか」という題で語って頂きました。坂入さんの略歴をお聞きすると、「なるほど、これはフルトヴェングラー・ファンになるような要素が沢山ある方だな。」という事も納得できました。その理由は
①歴史好きである事（フルトヴェングラーの家系も考古学者が多く、彼自身も歴史に造詣が深い）。
②幼い頃から、同曲異演の CD を聴いて、それぞれの良さを理解し、それを合わせたらより良くなるだろうという「イメージ」が形成されていた事。
③中学生の時には、回れる限りの図書館のカードを作り、週に最低 50 枚の CD を聴き、それを記憶にしみこませていった事。
等々です。

私自身、③までは行きませんが、図書館巡りをして、未聴の曲の LP や CD を聴きまくって（当時は廃盤になってしまっていたものも多かった）音楽への興味を高めていったという同じような体験はあります。しかし②のように、それを聴いて「自分ならこうする」という目的意識を持つことはありませんでした。そこが「タダのクラシックオタク」である私と、探究者であり、長じて指揮者になられた坂入さんの間にそびえる高い壁だったのかもしれません。
そんな坂入さんのフルトヴェングラーとの出会いは、中学校の先生から「是非聴いてみなさい」と渡されたシューマンの第 4 交響曲でした。坂入さん曰く「雷に打たれたほどの衝撃を受けた。3 楽章から 4 楽章への移行は毎回『奇跡か』と思うような事が起こる」とのことで、これは坂入さんのリファレンス的一枚になったようです。

もっとも、その後は当時図書館で借りられたフルトヴェングラーの CD がすべて暗い音しか鳴らない、ブルックナーのスケルツォの解釈に納得がいかない、SNS などフルトヴェングラーファンが集う場所の雰囲気が怖い、などで敬遠されていた時期もあったようです。この辺りは私自身も通ってきた道ですね（笑）。

その後、HMV の「超絶詳しすぎるコラム」やフルトヴェングラーの全演奏史などを読まれ、フルトヴェングラーが振る同世代作曲家の演奏を集中的に聴き、再び開眼したとのこと。この辺り「歴史が好きだった」坂入さんの素養が幸いしたのかもしれません。かくして、同時代の作曲家の曲を指揮する「モダニストとしてのフルトヴェングラー」に坂入さんが着目され、この日の講演に至ったということになりましょう。

さて、ここからは坂入さんが紹介して頂いた曲と演奏順に箇条書き形式で整理してみようと思います。基本的には、(1)曲目紹介、(2)フルトヴェングラーの演奏、(3)同曲異演で坂入さ

んが好きな演奏、(3)と(4)の違いおよび、フルトヴェングラーの演奏の特徴という形で進行していきます。

【1】マーラー：さすらう若人の歌

(1)フルトヴェングラーが遺した唯一のマーラー演奏であると同時にこの曲の演奏史に輝く金字塔です。私的にはおそらく「バイロイトの第九」以上に、この演奏を人気投票のトップから追い落とすような演奏が出てくるのは、中々難しい事ではないかと思っています。

(2)フルトヴェングラーの演奏において、坂入さんは第１曲「恋人の婚礼の時」のトライアングルに着目されました。曰く「通常のトライアングルより相当長く、バチも長めの真鍮製のものを使っていると思われます。そして少しタイミング的には早めに入れ、その長く引く余韻を曲に被せていますね。」という事でした。

(3)対照的な演奏として、ブリテン指揮による「恋人の婚礼の時」が紹介されました。ここでは本来のトライアングルを使っているので、余韻も短めで軽やかな響きです。

(4)両者の演奏を聴いて、フルトヴェングラーの「恋人の婚礼の時」は、長くたなびくトライアングルの余韻を使う事で、欧州の結婚式の鐘を想起させ、そして恋人を失った若人の深い寂寥感を表しているという事になります。驚くべきことに第 2 曲「朝の野を歩けば」ではこれが普通のトライアングルに持ち替えられていて、響きも軽やかで明るいものになり、若人が自然の中を散策する喜びが表されています。

この演奏を聴いた後、坂入さんは「私は指揮者として、楽団の皆さんに伝える者として『精神性』という曖昧な言葉は使わないようにしています。」と言われましたが、私もそれに同意します。このトライアングルの音の差を使い分けられるのはむしろ若人の心象風景を推しはかる事の出来る「洞察力」そしてそれから形成された「イメージ」を楽団の皆に共有させる力、がフルトヴェングラーには備わっていたからではないかと思うのです。譜面と詩から演奏者が「イメージ」を形成し、それを共演者にいかに伝達して共有するか、それが名演と呼ばれる演奏の一つの欠くべからざる要素なのかもしれませんね。

【2】ストラヴィンスキー：「妖精の口づけによるディヴェルティメント」

(1)第二次大戦以前は、フルトヴェングラーにとって、前期のストラヴィンスキーは重要なレパートリーで、特に「春の祭典」などはニューヨーク・フィルによるニューヨーク初演を手がけたほどに、入れ込んでいた曲のようです。では、戦後はなぜ戦前程とりあげなくなったのかという事に関しては、これは私の推測でしかありませんが、戦後の彼は自分に残された時間をフルに使って、自身の作品を含むドイツ音楽の復権に献身していたのではないでしょうか。そんな中でも、この「ディヴェルテイメント」の録音が遺されたのはファンにとって僥倖というべき事でしょう。

(2)フルトヴェングラーの同曲の演奏においては、坂入さんは「間の取り方」に注目されました。特にヴァイオリン・ソロが入ってくるところから徐々にテンポを落とし、弦のソロと管に

よるリズムの掛け合いを繰り返して徐々にスローにテンポに持って行くかと思えば、またテンポをもとに戻し、この音楽により一層の躍動感と愛らしさを与えている感があります。
(3)フルトヴェングラーの演奏を彷彿とさせ、さらにより「ロシア的」な要素を加えた名演として、坂入さんはロジェストヴェンスキーとロイヤル・コンセルトヘボウの演奏を挙げられました。テンポはインテンポなのですが、ここではポルタメントを使った弦の艶っぽさと、管の分厚さとのコントラストを付けることで、やはり音楽に躍動感と愛らしさを与えている気がしました。特に、決して派手に鳴らさず、抑制はされながらも厚みのある響きを聴かせる管が「ロシア的」な雰囲気を演出する大事な要素になっている気がしました。

(4)二人の演奏を聴いて思ったことは、フルトヴェングラーはストラヴィンスキーの音楽、特に初期の作品を演奏するにあたって、あまり「ロシア的」であることを強調していなかったのではないか、という気がしてきました。殊にこの「ディヴェルティメント」はフルトヴェングラーが得意としてきたチャイコフスキー、そのピアノ曲などから着想を得た作品なので、終楽章の「パ・ド・ドゥ」の軽やかさ、キュートさはなかなか得がたい魅力があります。フルトヴェングラーのまた意外な一面を坂入さんの選曲から教えて頂いた感がありましたね。

【3】バルトーク：ヴァイオリン協奏曲第 2 番

(1)指揮者の坂入さん曰く、「実はバルトークの名曲は指揮者泣かせなんです」とのこと。その典型例が、彼の代表作として知られている「弦楽器と打楽器とチェレスタのための音楽」、そしてこの「ヴァイオリン協奏曲第 2 番」も「カデンツァ後は”裏拍”になるのでめちゃくちゃ難しい」とのことです。リスナーには中々実感できないこういう演奏者の方の実体験を知る事もレクチャーコンサートならではではないでしょうか。

(2)メニューインとフルトヴェングラーの共演によるこの一枚は、今回のレクチャーコンサートの白眉と言っても良いものでした。フルトヴェングラーと共演するときのメニューインはいつも燃焼度の高い演奏をするのですが、このバルトークはそれに加えて抜群の切れ味を見せ、フラジオレットでの音の澄みなど、「神童」と呼ばれた頃の彼をもしのぐ、彼のトップパフォーマンスの一つに数えられるものだと思います。フルトヴェングラーの伴奏はハンガリー的な躍動感に満ちながらも、坂入さん曰く「前のめりになりすぎないようなタメがガッチリ効いています」とのことで、非常にスリリングでありながら、堅固な構築感も備えた正に万全の演奏になっています。

(3)坂入さんがこの名演に比肩する歴史的な演奏として挙げられたのが、セーケイのヴァイオリン、メンゲルベルクの指揮によるアムステルダム・コンセルトヘボウでのこの曲の世界初演です（1939 年）。流石に初演という雰囲気の中で、セーケイのヴァイオリンは前のめりになるところもありましたし、メンゲルベルクの指揮もさらにそれを煽るようなところもありましたが、この難曲のライブとしては申し分のない完成度と熱気にあふれた演奏で、この曲の知名度を決定づけた名演であることは、80 年以上経った今でも伝わってくるものがあります。

(4)この二つの演奏を聴いた後、坂入さんは「バルトークの醍醐味は実はその『静寂さ』にあるんです」と話されました。双方の演奏でもリタルダンド（テンポを次第に落としていく手法）が使われていますが、それはその「静寂さ」に行きつくための道程であり、無意味に遅くすれ

ばいいというものではない。フルトヴェングラーにしても、メンゲルベルクにしても、そのイメージを楽団員としっかり共有できているところが凄い、という事になるのでしょう。坂入さんの演奏に私たちが惹かれるのも実はその辺りにあるのかもしれませんね。

【4】シベリウス：「エン・サガ」

この曲に関しては、フルトヴェングラーの演奏(1943 年のライブ）のみの紹介になりましたので、他の演奏との比較はありません。坂入さんの演奏評としては「間の取り方がパーフェクトですね。それと、ヴィオラのハーモニーの変わり目が典型なのですが、和声・音の変わり目の扱い方が物凄く丁寧です。それが正にシベリウスでありながらワーグナーのような音世界を作っています。この作品を完全に掌中に収めている　という感じです。」という感じで絶賛でした。
私から付け加えることがあるとすれば、1943 年の録音であるのに、音割れなどがなく、レベル合わせもドンピシャに決まっているという事でしょうか。前回の「マイスタージンガー」など人の声が入る曲では流石にレベルオーバーでフェーダーを下げるような場所がありましたが、この収録は見事です。当時のエンジニアの技術の高さと音楽の全体像を良くつかんでいる事が伺える録音でした。

【5】ヒンデミット：ウェーバーの主題による交響的変容

(1)ヒンデミットは坂入さんにとっても大変重要な作曲家の一人だそうです。理由としては「音楽の守備範囲が広く、しかもそれが彼の音楽の中に凝縮されている。ドイツ文化の長短も全て凝縮されている。この曲の中にもちょっとジャズの要素が混じっているけれど、ドイツの面影が強すぎて『いたらなさ』のような物があるのが愛おしい。そして転調やハーモニーの達人である。」というところだそうです。

(2)ここでは、フルトヴェングラーの演奏だけでなく、他の二人の演奏（チェリビダッケ、坂入さん自身）の演奏も含めた話をしていきましょう。坂入さんはフルトヴェングラーの演奏について二つの特徴点を上げられました。それは
❶第 1 楽章のコントラファゴットが一部省かれている箇所がある。もしくはコントラファゴットが落ちている
❷第 4 楽章のテンポ設定が遅い。3 人の演奏の中でも一番遅い。（♩=58）
この事について、坂入さんはいくつかの考察をされています。当時のクラシック音楽シーンでは、スコアに手を入れることは珍しくはありませんでした（先述のメンゲルベルクなどは正にその典型です）。大体の指揮者がスコアに手を入れるときに「楽器を足す」のですが、フルトヴェングラーはその反対で「楽器を減らす」という手法を取る時もある（シューマンの 4 番など）。それもただ減らすのではなく、その楽器が復帰した瞬間を際立たせる効果もあったりするので、その辺りのセンスもフルトヴェングラー独特のものがある、ということですね。

(3)さて、ここからは特徴点❶、❷に関する純粋な私の感想を書きたいと思います。私は、この演奏が収録されたベルリンのゲマインデハウスという会場を知らないので、完全な推測になりますが、３楽章くらいまでで聴いた感想としては響きに独特の癖がある会場に感じました。端的に言えば「壁に近い楽器（ティンパニ、ホルン、コントラバスなど）の音が膨らむ」という癖です。これによって、低域の方にまつわり付くような響きが付き、歯切れも悪くなる。そこで、第４楽章ではテンポを遅めに取り、ティンパニも抑えて叩かせることで、しっかりとリズムを刻ませ、音楽がダレることを防いでいるのではないか、という感想です。

このあたり、奇しくも比較演奏で出てきたチェリビダッケが「フルトヴェングラーにテンポの設定を尋ねたところ『それはどう響くかによるね』という答えが返ってきた。それは私にとって啓示だった。」と語っていた事を体現した演奏・録音だったのではないかと思った次第です。ちなみに、チェリビダッケの演奏は一聴したところかなり響きの良い会場で、フルトヴェングラーより早めのテンポを取っていても「しっくり来る」「違和感を感じない」仕上がりになっていました。

以上 5 曲を「モダニストとしてのフルトヴェングラー」として坂入さんは紹介された訳ですが、全体的な感想としては「流石の選曲・構成だな」と感じ入るしかありませんでした。と同時に、坂入さん自身の感想を通じても、「フルトヴェングラーはこう考えて演奏したのだろう」という納得度がとてもよく伝わってくる講演でした。

にこやかに話される坂入さんですが、演奏を聴くときの姿勢は例えそれが PC からの音源であっても、真剣そのもの。目を閉じず、両スピーカーの中心をしっかりと見据えて、そこに展開される音世界を五感をフルに動員して捉えようとする姿勢には凄みすら感じました。それは坂入さんが本当に音楽を聴くのが好きなリスナーであると同時に、様々な曲、様々な演奏から受けるイメージを自分の中に取り入れ、そして団員の方と共有しようとする責任感が成せることなのかもしれません。

今回のレクチャーコンサートはスピーカーのセッティングも含めて、薬師寺さんに頼りきりで、音響担当としての御役目を殆ど果たせなかった私でしたが、そんな真摯な坂入さんから、「本当にメニューインもフルトヴェングラーも素晴らしい！」「モノーラルでもこれだけ奥行きと立体感が感じられるなら私は十分です」と言って頂けたのは本当に嬉しい事でした。「現代を生きるモダニスト」若きマエストロ、坂入健司郎さんの今後のますますのご活躍を期待して、このレポートを締めさせて頂こうと思います。
本当にありがとうございました。

＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

## 第 102 回レクチャー・コンサート（講師: 舩木篤也氏）

（2025 年 4 月 13 日 （日）開催）

**フルトヴェングラー・センター　音響担当理事　中村匠一**

4/13（日）のフルトヴェングラー・センターの第 102 回レクチャーコンサートは、音楽評論家の舩木篤也さんをお招きして、フルトヴェングラーとブルックナー「第 7 番」の交響曲について語って頂きました。

舩木さんは、先頃上梓された随筆集「三月一一日のシューベルト～音楽視点の試み」の中でも、「ほんとうは怖いブルックナー？」という一文の中で、ブルックナーの「交響曲第 4 番」における初稿とその後の稿のあまりにも大きな違いについて触れられている通り、非常にブルックナーの音楽に関して造詣が深い方です。なので、このレクチャーコンサートもまずは 7 番の交響曲の初演（1884 年 12 月 30 日）を巡るエピソードと、「版」の違いについてからお話がスタートしました。

この「稿」や「版」の違いは、日本のクラシックの掲示板で「ブルオタ」（笑）と呼ばれる熱烈なブルックナーファンにとっては汲めども尽きせぬ話題であるとともに、初めてブルックナーを聴く方にとってはある意味「躓きの石」的な存在でもあります。正直に白状してしまうと私自身もこの話題があまり得意ではありません（笑）。ですが、舩木さんのお話では実際の

演奏例も交えてその違いが明確にされ、ブルックナーの音楽の深さを改めて認識した機会になりました。

大雑把に言えば、7 番の交響曲には以下の 4 つの「版」があります（ピアノ編曲などは除く）。
①グートマン版（大指揮者、カール・ムックの加筆に基づく）
②ハース版（第 1 次全集の一環で、ブルックナーの指示とは疑わしい加筆をすべて排除したもの。舩木さん曰く「まっさらな白地図」だと思ってください　とのこと）
③ノヴァーク版（第 2 次全集の一環で、ハース版を元に、細部の修正を加えたもの。かなりグートマン版的な要素も加味されている）
④ホークショー版（近年の研究を元にした校訂版。第 3 次批判全集の一環だが、この全集は曲ごとに校訂者が違う。例えば 4 番の校訂者はベンジャミン・コーストヴェット）
で、この版を元に、第 1 楽章の第 1 主題から第 2 主題を舩木さんが選定された指揮者の演奏で聴くという体験が出来たのですが、これがもう「百聞は一聴にしかず」という感じで驚くほど違う。譜面に書かれた”Alla breve"＝「1 小節を 2 分割で」という指示を頭に入れながら「是非、指揮真似をしながら聴いてみてください。」という舩木さんのアドバイスに従って聴いてみるとその違いが如実に判るのです。

例えば、ハース版を採用しているヴァントの演奏などは、非常にテンポが明快で「1 小節を 2 分割で」が守られている＝2 拍子で振りやすい　のですが、チェリビダッケの彼にとっても記念すべき 1992 年、ベルリンフィルへの復帰演奏会での第 1 楽章は余りにもゆったりとしていて「4 拍子じゃないと振れないな」と思うほど。で、実際の映像を見るとチェリビダッケ自身は 2 拍子で振っていて、あの名手揃いのベルリンフィルがまなじりを決して、必死に彼の指揮に食らいついていく様が印象的でした。また、ノヴァーク版を採用しているヨッフムの演奏では第 2 主題の再現部をクラリネットのみで演奏していて、これもオーボエをプラスするハース版とは異なるシンプルな美しさがあって、良いものでした。

では、我らがフルトヴェングラーの演奏する第 7 番の 1 楽章はどうであったか？というと、第 1 主題はオーソドックスな 2 つ振り（2 拍子）なのですが、第 2 主題になると 4 拍子に近くなる。これはどちらかというとノヴァーク版のテイストに近いのですが、彼がこの演奏（1949 年）を録音したときにはノヴァーク版は出ていないことを考えれば、これはグートマン版の指示をとりいれたものであろうことが推察できます。そして、舩木さんがこの曲で「最も美しい」と表現された展開部では、彼の自在な呼吸が演奏から感じ取れますし、第 3 主題へ入る前の加速とリタルダンドはこの曲に大きな抑揚を与えています。この辺りはグートマン版とノヴァーク版の共通点である「活気をもたせて」という指示を具現化しているように思えます。いっぽう、再現部での第 2 主題はハース版にならっています。ここまで見てきた感じでは、フルトヴェングラーはハース版とグートマン版の「ハイブリッド」的な演奏を展開しているように思えます。

ここからはフルトヴェングラーの演奏に焦点をあてて、続く楽章の感想を舩木さんの指摘されるポイントに従って書いていこうと思いますが、舩木さんが「この曲の第 2 楽章でも最も印象深い演奏の一つ」とされた 1942 年のテレフンケンに録音された演奏では、旧フィルハーモニーの響きも相まってか、この楽章で舩木さんが重視されている「メゾフォルテ」の加減が実によく捉えられていて、非常に陰影に富んだ演奏になっています。また、1949 年盤だけの特徴として、クライマックスにおける打楽器の入れ方があります。彼自身の判断でティンパニを頂点に達する前から入れ、少しずつクレッシェンドさせ、頂点でトライアングルとシンバルと

ともに炸裂させるという劇的な盛り上がりを演出しています。ハース版の指示ではここに打楽器をいっさい入れないので、それを採用しているヴァントの演奏と比較すると違いが良くわかります。

第 4 楽章におけるフルトヴェングラーの演奏の特徴は、なんといっても再現部の第 3 主題から第 2 主題に移行する部分での非常に長いパウゼ（間）でしょうか。舩木さんの解釈では、ここでのゲネラルパウゼはこの両主題の間に断絶があること、そしてその特異性を強調するという狙いがフルトヴェングラーにはあったのではないか、という事でした。この第 4 楽章は曲全体から見れば意外な程あっさりと進んでしまう曲で、ハース版を採用した下野竜也さんの音源などを聴くと、第 3 主題の滑稽味を打ち出して清々しいくらいに軽やかな演奏なので、そのギャップに驚かされるという事もありました。そしてその両端とも言える解釈がどちらも良い演奏として受け入れられてしまうことも、ブルックナーの音楽の深みと言えるのかもしれません。
ここからは、この日の本題に入ります。つまり「何故フルトヴェングラーはハース版とグートマン版を併用したようなアプローチにたどり着いたのか？」です。これは舩木さんの楽曲解説と、この曲の初演時のエピソードを交えて、私の感想を書いてみたいと思います。
舩木さんはこのブルックナーの「交響曲第 7 番」の各楽章の構成を大まかに言えば次のように説明されました。
・第 1 楽章：自然讃歌
・第 2 楽章：祈りの音楽
・第 3 楽章：インテルメッツォ（間奏曲）
・第 4 楽章：カプリッチョ的な人間社会のおかしみ
全体的に 4 番に次ぐ親しみやすいメロディに溢れていながら、非常にバリエーションにとんだ曲である事、そして第 1 楽章の主要主題を第 1、第 2、第 4 楽章でいろいろに変化させながら遍在させつつも全く作為性を感じさせないという、驚くべき技巧が駆使されている事、その 2 つをとっても、聴けば聴くほど、知れば知るほどブルックナーの天才を実感させられる曲になっています。

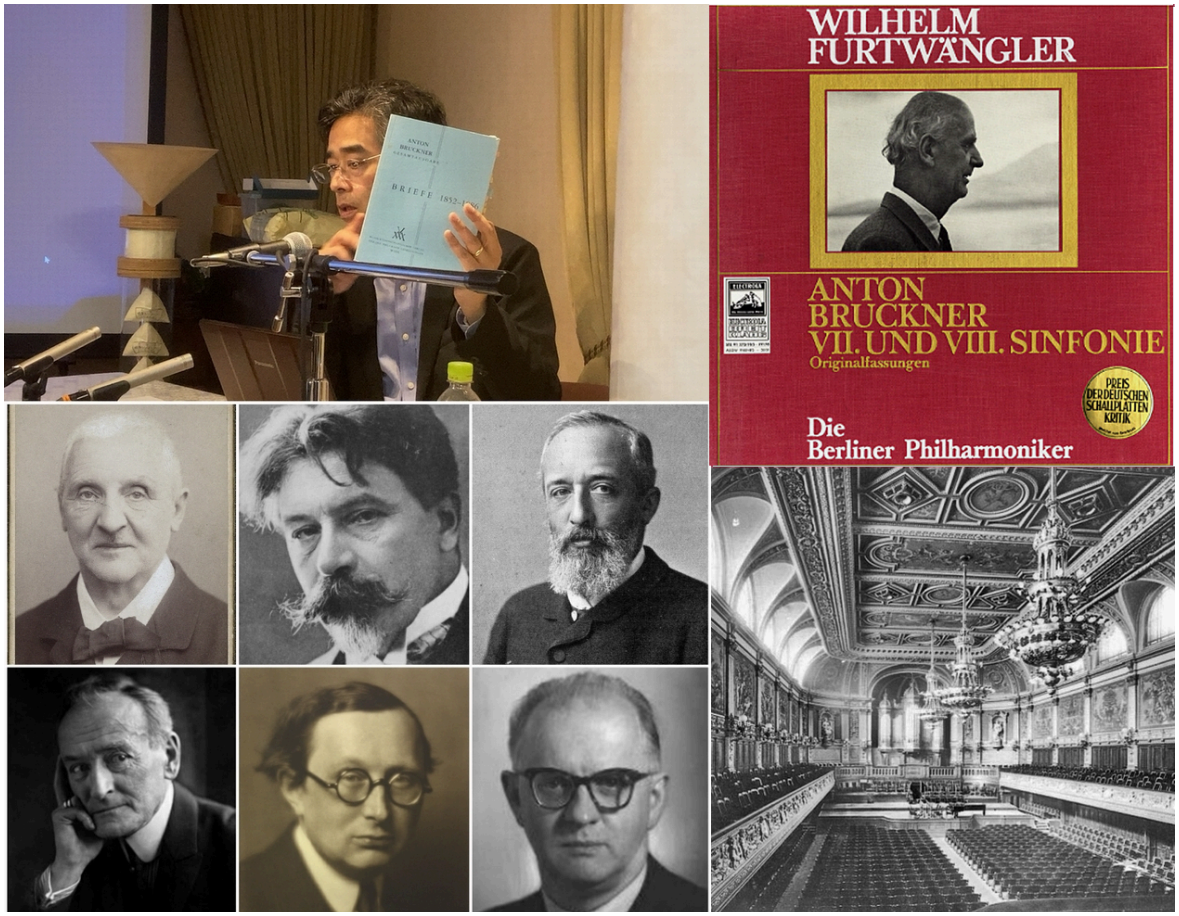
おそらくそれが理由なのでしょうが、ブルックナーは作曲した当時、この曲が聴衆に受け入れられるかどうかかなり心配していたようです。写真の舩木さんが手にしている水色の本はブルックナーその人の書簡集なのですが、ここで彼は初演の指揮者であるアルトゥール・ニキシュに「この作品は私の曲を初めて聴く人には難しすぎないだろうか？4 番を代わりに演奏してもらった方がいいだろうか？」と何度か問いかけていたようです。

最終的には、バイロイトの三羽烏の一人であり、ワーグナーが疎んじたユダヤ人でありながら「パルジファル」の初演を担った巨匠、ヘルマン・レヴィの「これは本当に親しみやすい曲で、特に第 2 楽章には胸にグッとくる感動があります。」というアドバイスを受けて 7 番を選択。最後 2 回のリハーサルにはブルックナー自身が立ち会った末に、ニキシュとライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団による初演は大成功を収めました。ゆえに、戦火で失われてしまった旧ゲヴァントハウスの空間はこの曲を生んだゆりかごとも言える存在であったのです。

フルトヴェングラーにとって、この曲を初演したニキシュは「私が最も影響を受け、なんとかしてあの音を手に入れたいと思った」存在であり、旧ゲヴァントハウスは彼の人生においても大きな比重を占めるホールであることから、彼もこのエピソードは知っていたのだろうと私は推察しています。そして、グートマン版の加筆を手がけたのは、フルトヴェングラーがバイロイトで何度も会話を交わし、恐らくそのブルックナーの演奏も実際に聴いたであろうムック

です。なので、彼がその大切な思い出と共に「良きドイツの伝統」の守護者としてグートマン版の要素を取り入れたのは自然な事と言えます。

ですが、前回の坂入さんのレクチャーコンサートでも明らかになったように、フルトヴェングラーには同時代の作曲家、演奏家の「良い仕事」を積極的に認め、それに寄り添おうとする「進取の精神」もありました。彼は 1944 年に成された、ローベルト・ハースの校訂を高く評価し、自分の演奏にも取り入れていこうとした。その両方の思いが結実したのが 1949 年の演奏だと言えるのではないでしょうか。




写真左上から：　アントン・ブルックナー　アルトゥール・ニキッシュ　ヘルマン・レヴィ
カール・ムック　ローベルト・ハース　レオポルト・ノヴァーク

このレクチャーコンサートの最後に、ハース版が生まれる前の 1942 年の演奏の SP と、1949 年の演奏のブライトクランク盤を聴きました。様々な音楽に接しておられる舩木さんも、SP 盤のエネルギーと密度の濃い音には驚かれたようですし、ブライトクランク盤もそのコントラバスのピツィカートの響きの良さを評価されていました。どの時代に作られた、どのようなメディアであっても、尊重されるべきはそれを作った人たちの意志であり、心意気であることは疑いようもなく、聴き手の私達にとってそれをいかに受け止めるか、が大切な事なのだろうと実感しました。ブルックナーの版の問題も同じで、版の違いはあれども優れた演奏はいつの時代にも産まれうる。それを先入観なく受け入れていきたいなと思った、今回のレクチャー・コンサートでありましたね。

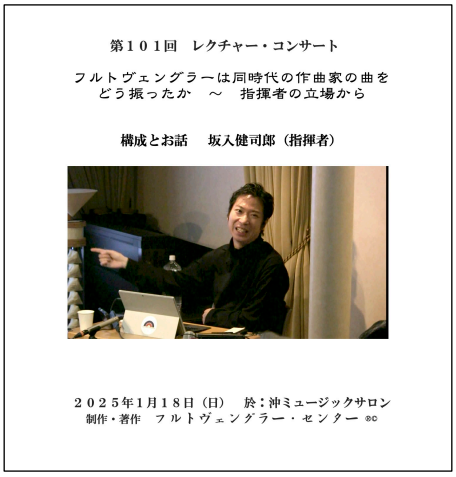
改めて講師の舩木さんと、ご助力、ご参加いただいたフルトヴェングラー・センターの皆様に厚く御礼申し上げて、私の感想を終わりたいと思います。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

# 頒布資料

恒例により上記のレクチャー・コンサートをビデオ収録致しました。遠隔地やお仕事その他で参加いただけない方々のためにブルーレイ・ディスクで頒布いたしますのでご利用ください。

引き続きメニュー画面を用意して扱いやすくするとともに、講師のお話は音響用マイクロフォンで録音し、観賞用再生音源ともDSDレコーダーで別途収録し、聴きやすさと高音質を追求しています。鑑賞に使用した音源は96kHz/24ビットPCM無圧縮ハイレゾ音源として収録し、そのままブルーレイ・ディスクに収録しています。




**WFER2501- BD　￥3,200**

**WFER-2502　¥3,200**

さらに当日配布、映写した資料、楽譜を適宜画面にはめ込み、理解しやすいよう編集し資料として大変充実した内容になっています。

**申込方法：**

1. 同封の郵便振込票をご利用下さい。
2. 一応の申し込み期限は **2025 年 5 月 30 日（金）**です。
3. 原則として締切り時のご注文数を元に製作いたします。それ以降もお申込は戴けますが、追加製作・頒布まで日時を要する場合がありますので、できるだけ期限までにお申し込みをお願い致します。
4. このディスクはセンター会員自身が所有される事を条件に 3 セットまでご購入いただけます。オークションを含む転売及び譲渡目的・名義貸しは一切お断り致します。
5. **発送：　2025 年 6 月以降**

お問い合わせの際は　①振込年月日、　②振込金額をお知らせ下さい

＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

## センター既発盤についてのご感想

WFHC-068/72（ブルックナー交響曲第７番の全て）

（名誉会長　アンドレアス・フルトヴェングラー）

Lieber Masayuki,

ich habe mit großer Freude die zwei CD-Pakete mit der Kairo-er 7. Bruckner Symphonie erhalten. Diese Aufführung ist großartig, sie bewegt das Gemüt und sie klingt gut genug, dass man einen tiefen Eindruck der Aufführung erhalten kann! Interessant auch die nur 2 Wochen später aufgenommene Römische Aufnahme, die im Vergleich für mich etwas abfällt, aber auch sehr schön ist. Der weitere Rahmen mit Debussy, Strauss und Wagner und nicht zuletzt die hübsche Aufnahme meines Vaters auf dem ägyptischen Kamel erheben dieses Coffret zu einer der besten Produktionen der Hallmark Collection. Lieber Masayuki: vielen Dank, Du hast mir und meiner Frau eine große Freude bereitet!

Herzliche Grüße aus Berlin,

Dein Andreas

親愛なる政行様、

カイロでの第７番ブルックナー交響曲を含む CD セット２組を大変嬉しく受け取りました。

この演奏は素晴らしいもので、心を揺さぶるだけでなく、音質も十分で、演奏の深みを十分に感じることができます！２週間後に録音されたローマでの演奏も興味深く、比較するとやや見劣りしますが、それでも非常に美しい演奏です。さらに、ドビュッシー、シュトラウス、ヴァーグナーの曲目構成、そして最後に、私の父がエジプトのラクダに乗って撮影した美しい写真が、このボックスセットをホールマーク・コレクションの最高傑作の一つに昇華させています。
政行様：本当にありがとうございました。私と妻に大きな喜びを届けてくださいました！

ベルリンにて、
あなたのアンドレアスより

（ヘニング・スミット）

**Furtwängler Conducts Bruckner's Symphony No. 7**

In this 5-CD set we hear all existing versions of the symphony recorded live and in studio from 1941 to 1951 – all versions played by the Berlin Philharmonic Orchestra. Unfortunately, his last performance of Bruckner's 7th on August 25, 1954 with the Philharmonia Orchestra during the Lucerne Festival was neither broadcast nor recorded.

The first CD gives us fragments from the BPO concert of February 2, 1941 recorded on decelith folios by Hermann May in Vienna. A dramatic performance judged from what exists. The rest of this CD contains the Telefunken studio recording of the 2nd movement from April 7, 1942 – recorded on tape! This – in my opinion – is the most beautiful of all 5 versions of that movement.

CD 2 presents the broadcast recording of October 18, 1949 in the Gemeindehaus in Berlin-Dahlem. This recording was the first commercial issue of a complete Bruckner symphony conducted by Furtwängler, it was published on LP together with the 8th symphony recorded on March 14, 1949 by Electrola as so-called "Breitklang", a kind of fake stereo. In France these symphonies were issued as pure mono, and that is what we hear here. I think, this is the overall best performance in this CD-set.

CD 3-4 present live performances from the BPO concert tour in 1951: Cairo (April 23, 1951) and Rome (May 1, 1951). As mentioned in my introductory note to the Cairo performance, DGG noticed: "This sounds as recorded in a desert storm", to my opinion: This CD sounds very well! The discant may be a little sharp, but the overall sound is truly the Furtwängler Bruckner sound! The Rome performance on CD 4 stem from a RAI tape recording published on LP with – in my opinion - restricted dynamic. This performance is the most slowly of the three complete performances in this CD-set – but very beautiful executed.

CD 5 contains the works performed in Rome after the interval: Debussy: 2 Nocturnes (Nuages ; Fêtes), R. Strauss: Don Juan, and Wagner: Tannhäuser Overture. This is the only existing recording of Debussy's work by Furtwängler, an important contribution to his French repertoire! Don Juan by Richard Strauss again stem from a RAI tape, here the dynamic – in my opinion - is much better than that of the Bruckner symphony. Finally, the Tannhäuser Overture by Richard Wagner is the only existing performance with Furtwängler conducting The Berlin Philharmonic Orchestra, alas, again, the dynamic of the recording is restricted… A very intense performance indeed!

Finally, the sleeve note by Mr. Atsuya Funaki on Bruckner is very important!

*Henning Smidth*
*April 24, 2025*

**フルトヴェングラー指揮　ブルックナーの交響曲第７番**

この５枚組の CD では、1941 年から 1951 年にかけてライヴとスタジオで録音された交響曲第７番の現存する全ヴァージョンを、ベルリン・フィルの演奏で聴くことができる。残念ながら、1954 年 8 月 25 日、ルツェルン音楽祭でのフィルハーモニア管弦楽団とのブルックナー第７番の最後の演奏は、放送も録音もされていない。

最初の CD は、1941 年 2 月 2 日にウィーンでヘルマン・マイによってデセリス・フォリオに録音された BPO 演奏会の断片が聴ける。現存する部分から判断する限り、劇的な演奏である。この CD の残りの部分には、1942 年 4 月 7 日の第 2 楽章のテレフンケンのスタジオ録音が収録されている！この楽章の 5 つのヴァージョンの中で最も美しいと私は思う。

CD2 には、1949 年 10 月 18 日にベルリン・ダーレムのゲマインデハウスで行われた放送録音が収録されている。この録音は、フルトヴェングラー指揮によるブルックナーの交響曲全曲の最初の商業盤であり、1949 年 3 月 14 日に録音された交響曲第 8 番とともに、エレクトローラからいわゆる「ブライトクラング」、一種の擬似ステレオとして LP で出版された。フランスでは、これらの交響曲は純粋なモノラルとして発売され、その音がここで聴けるものである。私は、この CD セットの中ではこれが全体的に最高の演奏だと思う。

CD3-4 は、1951 年の BPO 演奏旅行からのライブ演奏：カイロ（1951 年 4 月 23 日）とローマ（1951 年 5 月 1 日）である。カイロ公演の紹介文でも触れたように、DGG はこう指摘している：「これは砂漠の嵐の中で録音されたような音だ」それにしては、この CD の音はとても良い！伴奏部分は少しシャープかもしれないが、全体的な音はまさにフルトヴェングラーのブルックナー・サウンドだ！
CD4 のローマ公演は、LP で出版された RAI のテープ録音に由来するもので、私の意見ではダイナミックに制限がある。この演奏は、この CD セットに収録されている 3 つの全曲演奏の中で最もゆっくりとした演奏であるが、非常に美しい演奏である。

CD5 には、ローマでの演奏会の後半に演奏された作品が収録されている：ドビュッシー：２つの夜想曲（Nuages ; Fêtes）、R. Strauss：ドン・ファン、ヴァーグナー：タンホイザー序曲。フルトヴェングラーによるドビュッシー作品の現存する唯一の録音であり、彼のフランスもののレパートリーへの重要な貢献である！リヒャルト・シュトラウスの「ドン・ファン」も RAI のテープからのもので、ここでのダイナミックは（私の意見では）ブルックナーの交響曲よりもはるかに優れている。最後に、リヒャルト・ヴァーグナーの「タンホイザー」序曲は、フルトヴェングラーがベルリン・フィルを指揮した現存する唯一の演奏であるが、残念なことに、ここでも録音のダイナミックに制約がある！　但し演奏は極めて強烈である。

最後になるが、舩木篤也氏によるブルックナーに関するスリーブノートは非常に重要だ！

ヘニング・スミット
*2025* 年 *4* 月 *24* 日

（日本語訳　フルトヴェングラー・センター　中村政行）

＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

**フランス・フルトヴェングラー協会の新譜について**

**1943 年 12 月 12 日のブラームス・コンサート**
協会保有音源をリマスター
- ハイドンの主題による変奏曲
- ピアノ協奏曲第２番（ソロ：アドリアン・エッシュバッハー）、
- 交響曲第４番
ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
フランス協会制作の 24/192 及び 16/44 デジタル・ファイル
（フランス協会会員限定頒布）
ファイル番号：SWF D18　価格：15 ユーロ　（支払いは銀行振込又は Paypal)

＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

## 第 103 回　レクチャー・コンサート開催

開催日時：２０２５年7月１２日（土）

**開演 午後１時００分開演　終了 午後６時ころ**

内容は調整中です

**講師　舩木篤也 氏**

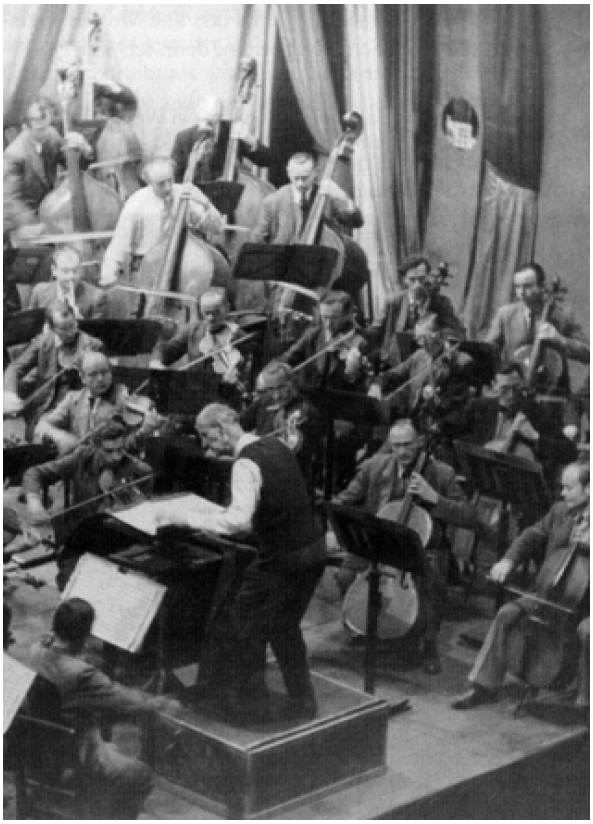
○参加費：
　センター会員１０００円、（非会員２５００円）
○会　場：東京都文京区千石１－１７－６
　　TEL　03-3943-5128
　　最寄駅：都営地下鉄三田線　千石下車、ＪＲ山手線　巣鴨下車
　　沖ミュージック・サロン
○お問い合わせ、予約：
　電話または E メールで下記まで。満席の場合はご入場いただけませんので、できるだけ予約ください。キャンセルは前日までにお願いいたします。
　　TEL：080-6603-3444
　　（電話でのお問い合わせなどは夜８時～１０時の間にお願いいたします）
　　E メール：info@furt-centre.com

　終了後、引き続き講師を囲んで懇親会を会場で開催いたしますので、是非お気軽に参加ください。参加費は２０００円程度で、当日会場でもお申し込みをお受けいたします。フルトヴェングラー・ファン同士で軽食とビール、ワインなどを食べ飲みながらの語らいはいかがでしょうか？

《お願い・お断り》

◎頒布資料の転売・譲渡等は禁止です！ 名義貸し・転売・譲渡・オークション出品は厳にお断りいたします。
◎郵便振込の控は、お支払いの証拠資料です。紛失せぬよう大切に保管下さい！
　センターにお問い合わせをいただく時は、振込控に記載の「郵便局受付日付」と「金額」をお知らせ下さい。
◎海外協会の CD 等につきましては、あくまで取り次ぎサービスのみをさせていただいておりまして、フルトヴェングラー・センターとしては製品のソースそのもの、および妥当な外見性までの保証責任はもっていないことをあらかじめご了解いただきますようお願いいたします。また、視聴に支障がないような損傷、汚れなどによるお取替え、返品はご容赦下ください。
◎寄稿の内容はフルトヴェングラー・センターの主張・見解を代表するものではありません。
◎発行人の許可なく記事・写真等を無断転載・転用することは厳にお断りいたします。

ホームページに掲載した会報では、原稿がカラー写真の場合はモノクロではなくカラーでご覧いただけます。



1947 年 ベルリン・フィルハーモニー


**フルトヴェングラー・センター会報第 72 号　　発行日　2025 年 5 月**
**編集・発行人　フルトヴェングラー・センター®**
**〒223-0052 横浜市港北区綱島東 2-14-16**



名誉会長：アンドレアス・フルトヴェングラー博士
名誉会員：ズービン・メータ、クリスティアン・ティーレマン、パーヴォ・ヤルヴィ、ヘルゲ・グリューネヴァルト
アドヴァイザー：ヘニング・スミット（通称　オルセン）
理事・会長： 中村政行　理事：市川悠一、大橋陽一郎、津野宏、薬師寺純平、呼川秀邦、中村匠一(音響担当)　監事：鹿内浩胤
チーフ・リサーチャー： 清水宏　　テクニカル・アドヴァイザー：清水公典　　相談役：桧山浩介



電話（お問い合わせなどは夜 8 時～10 時の間にお願いします）080-6603-3444
ゆうちょ銀行振込口座　00240-9-111630
ゆうちょ銀行以外からの振込先：　（口座名義）フルトヴェングラー・センター
【店名】〇二九（読み　ゼロニキュウ）【店番】029　【預金種類】当座【口座番号】0111630
E-mail : info@furt-centre.com　　URL： http://WWW.furt-centre.com